鞍馬天狗
觀世流改訂謡本
内 十二

鞍馬天狗

解題 平家物語に基き、義經幼にして鞍馬山に在りし頃、僧正が谷の大天狗より兵法を學び得たる事を作れり。古來宮增の作と傳ふ。異本糺河原勸進猿樂記に寛正五年四月十日の勸進能に音阿彌が演ぜしこと見え、親元日記に同六年三月九日同じく音阿彌が演ぜしこと見ゆ。

能之小書 白頭、素働の小書あり。

謠ひ方梗概 天狗物とはいへども善界車僧などゝは稍趣を異にし、これは武略の護神なれば、位大きくして心勇ましく、すべて細節に泥むことなく豪壯を旨とあるべし。

シテ 前は位を保ちて落着好く確りと謠ふべし。此要領にて名告を謠ふ。「遙に人家を見て云々は少しく間を取り、サシの調子なれども稍運びをゆるやかに扱ひ、取り澄したる體にもてなすが宜し。牛若との掛合、思を包みて外は落着きたるやうに承け應ふ。「いかに申候」玆より漸次氣を起して、ハキ〳〵とあるべく、「あら痛はしや」云々は和吟めきたる節扱にて、「所も鞍馬の木陰の月」と強みに確りと謠ひて地へ渡す。「今は何をかつゝむべき」云々は十分に位を取りて確りと大きかるべし。後は前よりもどつしりと大きく、聲調又強く逞しきを要す。「そも〳〵これは」の出、一聲の調子にて大々と謠ひ、地との掛合亦同じく、牛若との問答に入りては十分に位を取つて靜に確りと扱ひ、「あらいとほしの人や」以下、普通の語とも異り、諄々として諭すものゝ如くに弛みなく扱ふ。「其如くに和上﨟も」はやゝゆらりとあるべし。

子方 前後通じてさらりと、稍調子高なるが宜く、心持を附け又は巧みて謠はんなど思ふべからず。力めて卒直なるべし。「さるにても」よりはロンギの調子なり。後の出「偖も沙那王」がはサシの調子にて確りと勢好く謠ふ。總じて後は前よりも氣鋭なるを宜しとす。

ワキ 位普通なり。「何々西谷の花」の出能にては狂言の持ち來りたる文を受取りて見る所なれば、其心にて氣に弛みなくすらりと謠ひ、「今日見ずは」の一句を其前後と聊か更へ、「げに面白き」よりワキ自らの考へに移る心持にてやゝ趣を變ふ。詞は總じて少しく確りめなるが宜し。

地 初の「花咲かば」云々は、調子を更へて、晴れ〳〵と稍賑やかに謠ひ、「御物笑ひの種蒔くや」は、輕やかなる心にてすらりとあるべし。「見る人もなきは」さらりと出て、止メを聊か緩め、上歌より些の曲折な

く極めて普通にすら〳〵と扱ひ、「君兵法の」は稍カケて出、確りと謠ひ行き、「明日參會申すべし」とごつしり、以下位すゝみ、「飛んで行く」と確りと止め、「立つ雲を」と直に續けて、來序の前なれば段々に鎭めて納む。後は「たとへば」の一節、一聲の調子にて前の勢を失はぬやう稍急に謠ひ起し、「花やかなりける」より鎭めて確りと扱ひ、シテとの掛合は大きくごつしりとあるべく、「谷に滿ち〳〵」よりは稍位進みて烈しく謠ふべし。「張良履を捧げつゝ」は確りと扱ひ、「其如くに」よりゆるやかに、「そも〳〵」以下位莊重にして勢好く謠ふ。

辭解 **鞍馬** 鞍馬山。山城國愛宕郡。京都の北三里にある山。半腹に鞍馬寺あり。鞍馬寺は延曆中草創、毘沙門天を祭る。天永年間延曆寺に屬せしめてより今に天台宗なり。河海抄に「鞍馬寺は昔は四十九院ありけり。佛法の盛地なり」。 **僧正が谷** 鞍馬寺の西北十町。魔王堂あり。俗說天狗太郎坊の栖。 **客僧** 外來の僧 **東谷、西谷** 鞍馬の坊舍。東と、西谷にあるの谷にあるものとなり。 **けふ見ずは**云々 謠曲拾葉抄に定賴卿の歌とあれど、出所詳ならず。群書類從本の家集に無し。 **花咲かば**云々 賴政集に「花咲かば告げよといひし山守の來る音すなり馬に鞍置け」とあるを少し更へて引けるなり。 **うず櫻** うす紅色の櫻なりといへど明ならず。夫木抄卷四にうず櫻の歌三首いでたる外例證なし、唐鞍の裝飾に雲珠(うず)といふものあるにより、鞍に云ひかけ、鞍馬山とよみたる歌上記三首の中に二首あり。 **手折、栞** 櫻を手折るといひ、音を重ねて栞(しをり)に續く。木の枝を折りて路のしるべとなすを栞といふ。 **童形** 少年 **遙に人家を見て**云々 和漢朗詠集に出でたる白樂天の句に、「遙見$_{二}$人家$_{一}$有$_{レ}$花便入。不$_{レ}$論貴賤與$_{二}$親疎$_{一}$」。 **大悲多聞天** 大悲なる多聞天の意。大悲とは、苦の衆生を救ふ大なる惠。多聞天は毘沙門天王にして、鞍馬天の本尊なり。 **慈悲に漏れたる**云々 本尊既に大悲の多聞天なるに係らず慈悲心を持つことに洩れたる人々よとなり。 **花の下の半日の客**云々 平家物語少將都入りの章に「花の下の半日の客、月の前の一夜の友、旅人が一村雨の過ぎ行くに一樹の陰に立ちよりて、別るゝ名殘も惜きぞかし」。 **松蟲の音にだに**云々 引歌なるべしと思はるゝも未だ見當らず。松蟲に人を待つ心を寄せ、其音を受けて「音にだに立てぬ身」と續けたり。音に立てぬとは忍び音に泣くこと。身の音を受けて深山

櫻といひ、人に知られぬ身を深山の櫻に喩ふ。 **誰をかも** 云々 「誰か白雲」といへる韻を重ねて、古今集の藤原興風の歌「誰をかも知る人にせん高砂の松も昔の友ならなくに」を引き、友鳥の序辭とす。

御物笑の種蒔く 近世の俚諺に「權兵衞が種蒔けば烏がほじくる」といふ詞あり。これに類似したる古諺ありしには非るか。 **言の葉茂き** 詞の多きこと種蒔くとあるを受けて葉茂きといふ。 **戀ぐさ** 戀の情を草の茂るに譬へし語。其草の生ひ出づる意を寄せて老いに續く。 **老をな隔てそ** 云々 老人なればとて隔てたまふなの意。隔てといへるを垣に掛け、梅の縁にて花の情といふ。花の情とは、美しくほころび初めたる人情の意。牛若が客僧に情深きをいふ。此一節男同士の戀の意を含ませたりと見ゆ。古く寺にはよくあることなり。 **花に三春の約** 花の季節を違へざるを固き約束に喩へし諺。三春とは春三箇月。「花に三春の約あり。人に一何々」とありし古句に據れるにや未だ出處を知らず。 **うちつけに** すぐにといふ程の意。後いかなんとも知らねども馴れ初むるとすぐに。 **心空に** 心空になるといふを檜にかく。夢中になりて浮かるゝ意。 **檜柴の** 云々 萬葉集の人麿の歌に「御狩する交野の小野の檜柴の馴れはまさらで戀こそまされ」。檜柴とは檜の木なり。馴の序に用ふ。歌の意は親みは增さずして戀しき心のみ增るとなり。 **安藝の守清盛** 平清盛。久安二年に安藝守たり。

時の花 時勢にあひて花の如くもてはやさるゝ意。 **和上﨟** 御身上﨟といふ意。上﨟は位高き人。 **常磐腹には三男** 常磐は左馬頭義朝の妾なり。その腹に生れたる三男。異母兄弟多かりしかば斯く云ふ。 **沙那王** 源義經幼名を牛若丸と云ひしが、鞍馬に入りて後沙那王と改めたること、異本義經記其他に出づ。 **木蔭の月** 鞍馬の音に暗しといふ意を持たせて、木蔭れの月を云ひ、見る人も無きと續けたり。 **見る人もなき** 云々 古今集に「見る人もなき山里の櫻花よその散りなん後ぞ咲かまし」。 **松嵐花の跡訪ひて** 詩句又は歌句に據る所あるべしと思はるゝも見當らず。 **哀猿雲に叫んでは** 云々 哀しき猿の聲が、雲中に聞えては、行人の腸を斷たしむとなり。腸を斷つとは悲の極をいふ。和漢朗詠集に「五夜之哀猿叫レ月」といふ句の次に「猿過二巫陽一始斷レ腸」といふ句を載せたり。此二句よりとるか。 **夕を殘す** 花はあかるきものなれば、夜に入りても、夕

げしきの殘れるをいふ。鐘は聞えて云々入相の鐘は聞えながら夜の來ることの遲しとなり。奥は鞍馬の奥は旣に暗しといひかく。花ぞ知るべ花の明るさを道しるべに。さても此程云々牛若丸天狗の誘ふまゝに伴はれて、遠く離れたる所々の花を見たるなり。愛宕愛宕山。山城國葛野郡梅ケ畑の西、嵯峨村の西北にある大嶽。以下皆花の名所。高尾山城國葛野郡梅ケ畑村にあり。比良近江國滋賀郡にあり。横川近江國比叡山中の北の谷地。吉野大和國吉野郡に在り。初瀨大和國磯城郡に在り。天狗深山に栖めりと云ふ想像上の怪物。時代によりて想像せられたる形異なれども、平安朝以後は古き鳶の形をなし、飛行變通自在にして、時に法師山伏などの姿となり、佛法を妨げ人を害するものといひ慣はしたり。平治物語牛若奥州下の條に「晝は日ねもす學問を事とし、夜は夜もすがら武藝を稽古せられたり。僧正が谷にて天狗と夜な〳〵兵法を習ふと云々」。いでたち扮裝薄花櫻表白裏紅なる襲の色目の稱なれども、こゝには單(ひとへ)とあれば、薄紅色をいへるなるべし。ひとへは裏の無き下着。顯紋紗花の紋ある紗直垂古く庶人の著たる一種の裝束。その鎧下に著るを鎧直垂といふ。こゝにいへるはそれなり。露狩衣直垂水干などの袖の末に垂れたる括り紐。白糸の腹卷白糸にて絨せる腹卷。腹卷は鎧の一種。天魔鬼神天魔は天界の魔王。鬼神は鬼畜。それらにてもかくはけなげにあらじといふを嵐に掛け、嵐山の花を牛若の粧ひの花やかなる喩とす。筑紫九州彦山豐前國田川郡の南嶺。こゝに豐前坊といふ天狗ありと傳ふ。白峰讃岐國綾歌郡松山の高峰。こゝに相模坊といふ天狗ありと傳ふ。大山伯耆國西伯郡にある山陰道の最高峰。こゝにも伯耆坊といふ天狗栖めりといへり。飯綱の三郎飯綱は信濃國水內郡戶隱山の東に並びたる山。こゝに住む天狗を飯綱の三郎といふ。富士太郎駿河の富士に居る天狗を富士太郎といふ。大峰の前鬼大峰は大和國吉野郡に横はる大山脈。前鬼は役行者(山伏の祖)の使ひたりといふ鬼なれど、天狗の山伏姿なるより仲間として扱へり。葛城南葛城郡にある大和國西界の峻嶺。こゝにも天狗栖めりと傳ふ。以下の山々皆天狗のすみかなり。高間葛城山の上方の山。よそまでも云々新古今集の歌、「よそにのみ見てや止みなん葛城や高間の山

の峰の白雲」を引く。**邊土** 近邊の土地。**如意が嶽** 京都の東にあり。比叡の一支峰。**我慢高尾の** 天狗は我慢心高しといふを高尾にかく。**人の爲めには愛宕山** 人のために仇をなすを愛宕山にかく。**霞とたなびき**云々 變通自在なるをいふ。**天狗だふし** 深山にて突然暴風の如きすさまじき響の起る事。**稽古の際** 稽古の手際。**いとほし** かはゆらし。**漢の高祖の臣下張良**云々 張良は漢の高祖の臣にして蕭何、韓信と共に三傑と稱せられし人、下邳の圯橋にて一老翁に逢ひ、此曲に作れる如く兵法を授かり得たる故事あり。其老翁は穀城山下の黄石の化現なれば黄石公といふ。此事別に謠曲張良に作らる。**武略** 戰の驅引 **源平藤橘** 皇族より下りて人臣となりし四名家。源氏、平氏、藤原氏、橘氏。**水上** 源流こゝにては祖先の意。**清和天皇の後胤** 清和天皇の皇子貞純親王の子經基、初めて源の姓を賜はりたり。その子孫一族を清和源氏といふ。牛若丸もその後胤なり。**煙波滄波の浮雲** 波の如き浮雲。煙波といひ滄波といふも西海の縁にて、波の成語を出したるまでにて深き意無し。**會稽を雪がん** 越王勾踐が呉王夫差に滅されて、會稽山に籠り、十年にして其恥を雪ぎし故事。

裝束附

前シテ（山伏）

兜巾、篠懸、襟紺花色の類、着附無色厚板又は大格子厚板にも、白大口又は紺花色等にても、縞水衣、縫紋腰帶、山伏扇、平形珠數、小刀。

後シテ（天狗）

面大癋見、赤頭、大兜巾、赤地金緞鉢卷、襟紺花色の類、着附段厚板、半切、狩衣、縫紋腰帶、羽團扇（持）

子方（牛若及稚兒五六人）

襟赤又は淺黄、着附縫箔、稚兒袴、白腰帶又縫入にも、扇（持）

後子方（牛若）

白鉢卷又紅梅練にも、着附厚板、白大口、白水衣又は長絹にても、縫紋腰帶、長刀（持）、其他前に同じ。

ワキ（僧）

角帽子、着附無地熨斗目、大口、水衣、腰帶、扇、珠數。

ワキツレ（從僧）

角帽子、着附無地熨斗目、縷水衣、腰帶、扇、珠數。

五番目

鞍馬天狗（クラマテング）

三月

子方 牛若丸
シテ 大天狗（前ハ山伏）
ワキ 鞍馬東谷僧　狂言 能力

シテ詞（落著ヨクドッシリ）
「かやうに候者ハ。鞍馬の奥（オク）僧正（ソウジヤウ）が谷に住（ス）まひする客僧（キヤクソウ）にて候。偖も當山（トオザン）において。花見の由承り及び候間。立ち越（コ）えよそながら梢（コズヱ）をも眺めばやと存（大キク）候」

狂言シカ〴〵

ワキ詞（常ノ位ニ確カリ）
「何〻西谷（ニシダニ）の花今を盛（サカリ）とみえて候よ。などて御音信（オンノトヅレ）も與（アヅカ）らざる。一筆（イツピツ）

（サラリ）ヨワ吟

啓上せしめ給ふ古歌に曰く。けふ見ずは（拍子不合）くやしからまし花盛。咲きも残らず散りも始めず。げに面白き歌の心。たとへ

カハル上（氣ヲカヘテ爽カニ）

ば音信なくとも。来て見よとこそ待つべきに。

地上歌（朗カニ淀ミナク）

（拍子合）

花咲かば。告げんといひし山里の。告げんといひし山里の。使は来たり。馬に鞍。鞍馬の山のうず櫻。手折

栞をしるべにて。奥も迷はじ咲きつゞく。
木蔭に並み居ていざいざ花を眺めん・

狂言
△いかに申し候。あれなる客僧の渡り候これは
近頃狼藉なる者にて候。追つ立てう
ずるにて候▽

ワキ詞（聊カ確カリメニ）
暫らく。さすがに此座
敷と申すに。源平両家の童形達名
御座候に。かやうの外人は然るべからず候。

似ては候（トモ）

然れども又たやすく申せば人を選み申すに似て候。花をば明日こそ御覧候べけれ。まづ〳〵此處をば御立ちあらうずるにて候

狂言▵「いや〳〵それは御諚にて候へども。あの客僧達を連れ立てまうずるにて候▽

ワキ（確カリ）「いや唯御立ちあらうずるにて候」（拍子不合）

シテ上（シンミリト）「遥〳〵人家を見て花あれ

も即ちのる。論ぜず貴賤と親疎とを

辨へぬをこそ春の習と聞くものを。浮

世は遠き鞍馬寺。本尊は大悲多聞天

慈悲に洩れたる人ぞなき　子方カハル上（清クサラリ）げにや

花の下の半日の客。月の前の一夜の友。

それさへ好みはあるものを。あら痛は

しや近寄りて花御覧候へ　シテ（落著テ確カリ）思ひ

よらぞや松虫の音にだに立てぬ深山
櫻を。御訪ひのありがたさよ此山に
子方上（サラリ）ありとも誰か白雲の。立ち交はらねば
知る人なし
シテ下（確カリ・弛ミナク）誰をかも知る人にせん
高砂の
子方上（サラリ）松も昔の
シテ（確カリ）友烏の
地上（重クレズ・スラリ）（拍子合）御物笑ひの種蒔くや。言の葉茂き戀草の。
老をな隔てそ垣穂の梅偖こそ花の

●小謠

地拍子

うちつけよ

情なれ花は三春の約あり人は一夜を
馴れそめて後いかならんうちつけに心
空な楢柴の馴れはまさらで戀のまさ
らん悔しさよ。いかに申し候唯今の
兒達は皆々御歸り候よ何とて御一人
これに殘り給ふぞ　さん候唯今の兒
達は平家の一門中にも安藝の守清

盛（モリ）が子どもたるにより。一寺（イチジ）の賞翫（シヨオクワン）（中）（淀マズスラリ）他山（タサン）の覚（オボ）え。時の花たり。（拍子不合）みづからも同山（ドウザン）にハ候へども。よろづ面目（メンボク）もなき事どもにて月にも花にも捨てられてハ

シテ詞（深重ニ）あら痛（イタ）はしや候（ワ）。さりながら和上臈（ワジヨオロオ）ハ。常盤（トキワ）腹（バラ）にハ三男（サンナン）。毘沙門（ビシヤモン）の沙（シヤ）の字をかたどり。御名をも沙那王殿（シヤナオオドノ）とつけ申して。

（氣ヲカヘテ）中ニ

あら痛はしや身を知れば。所も鞍

（強ニニ確カリ）

地中（穏カニサラリト）

馬の木陰の月見る人もなき山里

（拍子合）カヘテ

の櫻花よその散りなん後にこそ咲かば

咲くべきにあら痛はしの事や

上歌（尋常ニ運ビヨク）

松嵐花の跡訪ひて。松嵐花の跡訪

ひて。雪と降り雨となる。哀猿雲に叫

んでは腸を断つとかや心すごの氣

（合方心得）見る人もなきノ句ニ大鼓ノ間ノ初拍ヲ付クベシ古来「木の芽漬」ノ隠語アルハ此心得ナリ

●小謡

色や。夕べを殘す花のあたり。鐘ハ聞えて夜ぞ遅き。奥ハ鞍馬の山道の。花ぞ知るべなる此方へいらせ給へや。稚も此程お伴して見せ申しつる名所の。或る時ハ。愛宕高雄の初櫻。比良や横川の遅櫻。吉野初瀬の名所を見殘す方もあらバこそ。さるにても。

いかなる人にてましませば。われを慰め給ふらん。御名を名のりおはしませ

シテ上（位大キク シッカリ）今は何をか包むべき。われ此山に年経たる。大天狗はわれなり。

地上（聊カカケテ確カリ）君兵法の大事を傳へて平家を滅し給ふべきなり。さも思しめされば明日参会申すべし。さらばといひて客僧は大僧正が

谷を分けて雲を踏んで飛んで行く／＼
立つ雲を踏んで飛んで行く

來序中入

後子方上　一声

偖も沙那王がいでたちには。肌には薄花櫻のひとへに顕紋紗の直垂の。露を結んで肩にかけ。白糸の腹巻白柄の長刀

地上

たとへ天魔鬼神なりとも。さこそ嵐の山櫻。花やかなりけるいでたちかな

地拍子 持
又 大嶺の
大嶺の

後シテ上（豪壮ニ大キク）
大應 打上
たちかゝる。抑これハ鞍馬の奥僧正が
谷に年経て住める。大天狗なり。打上 謳頭 打切（拍子合）地 まづ
御供の天狗ハたれ〳〵ぞ。筑紫にハ
シテ（強ク大キク）彦山の。豊前坊。地（確カリ）四州にハ。シテ（ドッシリ）白峯の。
相模坊。大山の伯耆坊。地上（確カリ餘ヤカニ）飯綱の三郎
富士太郎。大嶺の前鬼が一党。葛城
高間。よそまでもあるまじ。邊土にお

それハ比良。横川。如意が嶽。我慢高雄の峯に住んで。人の為にハ愛宕山。霞とたなびき雲となつて。月ハ鞍馬の僧正が。谷に満ち満ち峯を動かし。嵐木枯瀧の音。天狗倒しハおびたゞしや。

いかに沙那王殿。唯今小天狗を来らせて候ぞ。稽古の

子方（清クスラリ）〽さんば
きはやばあんぼうを御見せ候ぞ
唯今小天狗どもが来りは程よ。薄手なりとも
斬りつけ。稽古のきはを見せ申したくは
候ひつれども。師匠よりや叱られ申さんと
思ひ留りて候（拍子不合）
シテ中〽（ドッシリ）あらいとほしの人や。
祐（確カリ）さやうに師匠を大事に思しめすによ
ついで。さる物語の候。語つて聞かせ申

いべし」。倩も漢の高祖の臣下張良と語（慎重ニ弛ミナク）

いふ者。黄石公より箇の一大事を相傳せし。

或時馬上にて行き逢ひたりし何

者かしたりけん。左の履を落し。いかに

張良あの履取つてはかせよといふ。

安からずは思ひしかども履を取つて（抑ヘテ運ビヨク）

はかせ。又其後以前の如く馬上にて

●囃子切迄

行きあひたりしに今度は左右の履を落しゝやあいそ張良あの履取つてはかせよといふ。猶安からず思ひしかども。よしこの大事を相傳する上と思ひ。落ちたる履をおつとつて

地上　張良履を捧げつゝ。張良履を捧げつゝ。馬の上なる石公にはかせけるぞ

心解け兵法の奥儀を傳へける。

シテ中（ヤ、ユラリト）其如くは和上臈も。

地（緩ヤカニドツシリ）其如くは和上臈も。さも花やかなる御有様にて姿も心も荒天狗を。師匠や坊主と御賞翫い。しう

よも太事を残さじと傳へて平家を討

上歌（荘重ニ勢ヨク）たんと思しめすかや優しの志やさ

獨吟仕舞 太鼓頭 そもそも武略の誉の道

舞働 打上打返（ヤア）そもそも

拍子扱
煙波

地拍子
雪がん。御身と

弓馬の譽の道。源平藤橘四家にも
とり分きかの家の水上。清和天皇
の後胤として。時節を考へ
来るよ驕れる平家を西海に追下し。
煙波滄波の浮雲に飛行の自在を
受けて。敵を平らげ。會稽を雪がん。
御身を守るべしこれまでなりや。お暇

申して立ち帰れば。牛若袂にすがり給へば。げに名残あり。西海四海の合戦といふとも影身を離れず弓矢の力を添へ守るべし。頼めや頼めと夕陰暗き。頼めや頼めと。夕陰鞍馬の梢に翔つて。失せにけり。

文學博士 井上頼圀本文監修
丸岡桂本文訂正
觀世清之節附訂正

稽古摘要

習ひたる師匠	
始めたる年月日	大正　年　月　日
終りたる年月日	大正　年　月　日
稽古	
感想	

發行所 東京市神田區今川小路三丁目九番地
電話九段二三〇五、振替東京一三四七五
觀世流改訂本刊行會

使用家の特權

觀世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別能組二十八番二十八冊の各一組、或は三組を悉く買ひ揃へられし節、送料を添へて發行所へ送附せられれば、發行所は無料にて五番綴の美本に仕立直し御返送可申上候。かくして使用家は期せざるに一揃の五番綴謡本を得らるべく候

大正十四年五月一日印刷
大正十四年五月五日發行

大正版 一番綴

發行者 東京市神田區今川小路三丁目九番地 土居源太郎
印刷者 東京市神田區東松下町十二番地 鈴木彌作
印刷所 東京市神田區東松下町十二番地 信英堂印刷所

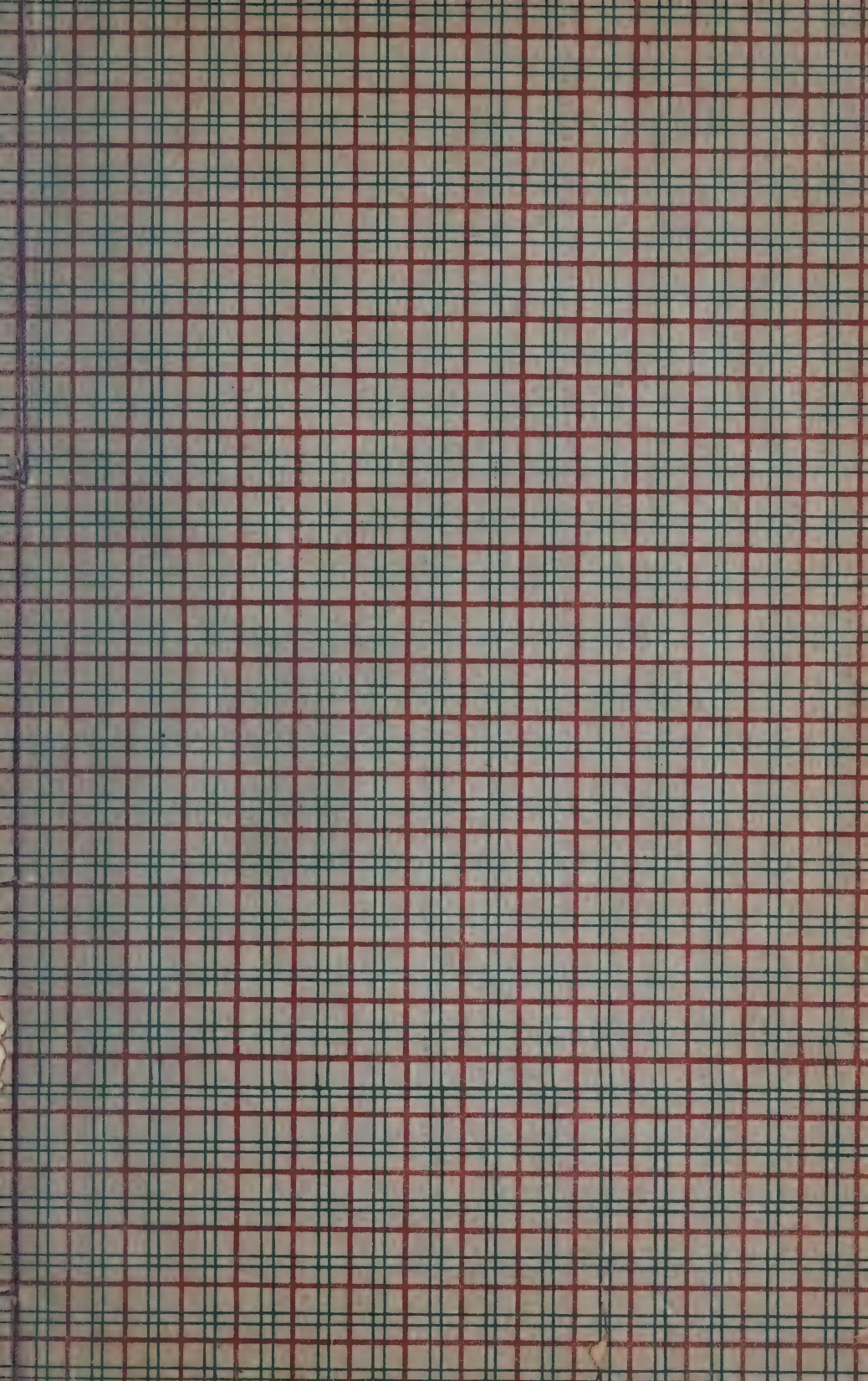
八嶋
觀世流改訂謡本
内十一

二番目

八島

三月

前ヅレ 從（漁夫）
シテ 源義經ノ靈（前ハ漁翁）
ワキ 僧

ワキ次第上（三人）

月も南の海原や。月も南の海原や。屋島の浦を尋ねん

ワキ詞　これは都方より出でたる僧にて候。われ未だ四國を見ず候程に。此度思ひ立ち西國行脚と志し候

道行上（三人）

春霞。浮き立つ浪の沖つ舟。浮き立つ浪の沖つ舟。入日の雲

も影添ひて。そなたの空と行く程に。遙ゞなりし舟路にて。屋島の浦に著きにけり。屋島の浦に著きにけり

急ぎ候程に。これははや讃岐の國屋島の浦に著きて候。日の暮れて候へば。これなる。塩屋に立ち寄り。一夜を明かさばやと思ひ候

一声

面白や月海上に

浮かんで波濤野火に似たり

ツレ 漁翁夜西巌に傍うて宿す。暁湘水を汲んで楚竹を燃くも。今に知られて蘆火のかげ。ほの見えそむる。ものすごきよ

シテ上 月の出潮の沖つ波

ツレ 霞の小舟。こがれ来て

シテ あまの。呼聲。里近し

シテサシ上 一葉萬里の舟

の道。唯一帆の風に任せ　ツレ　夕べの空の雲の浪。月の行くへに三ち消えて。霞に浮む松原の。影ハみどりに映ろひて。海岸そことも不知火の筑紫の海や。續くらん　下歌　とこい屋島の浦傳ひ海士の家居も數々に　上歌　•釣のいとまも波の上。釣のいとまも波の上。

霞み渡りて沖行くや。海士の小舟の。ほの〴〵と見えて残る夕暮。浦風までも長閑なる。春や心を誘ふらん春や心を誘ふらん。

シテ詞 まづ〳〵塩屋に帰り休まうずるにて候

ワキ 塩屋の主の帰りて候。立ち越え宿を借らばやと思ひ候。いかに此塩屋の内へ案内申し候

ツレ「誰にて渡り候ぞ　ワキ「諸國一見の僧に
て候。一夜の宿を御かし候へ　ツレ「暫く
御待ち候へ。「主に其由申候べし」。いかに
申候。諸國一見のお僧の。一夜のお宿を
仰せ候　シテ「易き程の御事なれども。
餘りに見苦しく候程に。お宿は適ふ
まじきよし申候へ」　ツレ「お宿の事を申

して候へぞ。餘りに見苦しく候程に。
適（カノ）まじきよし仰せ候。「はやく
見苦しきは苦しからず候。殊にこれは
都方の者にて。此浦始めて一見の
事にて候が。日の暮れて候へぞ。ひらに
「一夜（イチヤ）と重ねて御申候へ」ツレ「心得申候。」
唯今のよし申して候へば。旅人（タビビト）は都の

今まで御入り候が。日の暮れてゆくぞ。
ひらに一夜と重ねて仰せ候。シテ なに旅
人は都の人と申すか ツレ さん候 シテ げに
痛はしき御事かな。さらばお宿を
貸し申さん ツレカヽル上 もとより住みかも
蘆の屋の シテ詞 唯草枕と思しめせ
ツレ上 しかも今宵は照りもせず シテ 曇りも

果てぬ春の夜の朧月夜よ敷く
物もなき海士の苫屋島よたてる
高松の。苫の席は痛はしや　上歌　さて
慰みは浦の名の。さて慰みは浦の名の。
群れ居る鶴をも御覧ぜよ。などか雲
居よ帰らざらん。旅人の古里も。都と
聞けばなつかしや。われらももとはとて

やゝて涙はむせびけりやゝて涙はむせ
びけり。　いかゝ申候。何とやらん似合
はぬ所望にて候へども。古へ此處は源
平の合戰の巷と承りて候。夜もすがら
語つて聞かせ候へ　易き間の事語
つて聞かせ申候べし。語　扨も其頃は元暦
元年三月十八日の事なりしよ。平

事ありしよ

家ハ海の面一町ばかりに船をうかめ。
源氏ハ此汀にうち出で給ふ。大将軍の
御いでたちにハ。赤地の錦の直垂に。
紫裾濃の御着背長。鐙ふんばり
鞍かさにつゝ立ちあがり。一院の御使。
源氏の大将検非違使五位の尉。源の
義経と名のり給ひし御骨がら。あつ

ぱれ大将やと見えし。今のやうに思ひ
出でられては。其時平家の方よ
りも。言葉戰ひ事終り。兵船一艘漕
ぎ寄せて。波打ち際に下り立つて。陸の
敵を待ちかけしに　源氏の方にも
續く兵五十騎ばかり。中にも三保の
谷の四郎と名のつて。眞先かけて見え

四郎と名のつて

え所に ワレカヽル上平家の方にも悪七兵衛
景清と名のり。三保の谷を目がけ戦
ひしに シテ上彼の三保の谷は其時に。太刀
うち折つて力なく。すこし汀にひき退
きしに ツレ上景清追つかけ三保の谷が
シテ上着たる兜の錣を掴んで ツレ上後へひけば
三保の谷も シテ中身を遁れんと前へひく

ツレ〽互にえいやと　シテ〽引く力に　地上〽鉢附の
板より。ひきちぎつて左右へくわつとぞ
退きにけるこれを御覧じて判官。
馬を汀に打寄せ給へば。佐藤継信
能登殿の矢先にかゝつて馬より下に。
どうと落つれば。舟には菊王も討たれ
ければ。共に哀とおぼしけるか舟は沖へ

壺ハ陣よ。相しきまよしくみのあとゐ図の聲絶えて。磯の浪松風ばかりの音寂しくぞなりにける。不思議なりとよ海人の。余り憂き物語。其名をも名のり給へや我が名を何と夕浪の引くや夜汐も朝倉や。木の丸殿にあらざれどもこそ名のりをしても行く

ま　げにや言葉を聞くからに。其名
ゆかしき老人の　昔を語る小忌衣
頃しも今は　春の夜の　潮の落
つる暁ならば修羅の時になるべし
其時は。我が名や名のらん。たとひ名の
らずとも名のるとも。よしつねの浮世の
夢ばし覚まし給ふなよ夢ばし

覺まし給ふなよ

中入

ワキ平　不思議や今の老人の。其名を尋ねし答へにも。よし常の世の夢心。覺まさで待てと聞えつる

上歌待謡　聲も更け行く浦風の。聲も更け行く浦風の。松が根枕敷て。思ひを展ぶる苔席。重ねて夢を待ち居たり重ねて夢を待ち

居たり、

後シテ上 一声

落花枝に帰らず。破鏡二たび照らさず。然れども猶妄執の瞋恚とて。鬼神魂魄の境界に帰り。われと此身を苦めて。修羅の巷に寄り来る波の。浅からざりし。業因かな

ワキカヽル上

不思議や早曉にもなるやらんと。

キ上

思ひ寝覚の枕より。甲冑を帯し

見え給ふぞや。若し判官にてましまさば

シテ詞「われ義経が幽霊なるが。瞋恚に引かるゝ妄執にて。猶西海の浪に漂ひ。生死の海に沈淪せり

ワキ「愚かや心からこそ生死の。海とも見えつれ真如の月の

シテ下「春の夜なれど曇なき心も澄める今宵の空

ワキ「昔を今に思ひ出づる

舟と陸との合戦の道、所からとて
忘れえぬ、武士の、屋島よ射るや槻
弓の、屋島よ射るや槻弓の、本の身
あづら又とこよ、弓箭の道は迷はぬよ、
迷ひけるぞや、生死の、海山を離れや
らで、帰る屋島の恨めしや、とよかくよ
執心の、残りの海の深き夜よ、夢物語、

申すなり夢物語申すなり。（クリ上）忘れぬ
物を閻浮の故郷に去て久しき年
波の。夜の夢路に通ひ来て。修羅道
の有様現すなり（シテサシ上）「思ひぞ出づる
昔の春。月も今宵に冴え返り（地）「本の
渚はこゝなれや。源平互に矢先を揃へ。
船を組み駒を並べて。うちいれうちいれ

又ハ 流れ行くを

足なみよくつばみを浸して攻め戦ふ

シテ詞 其時何とかしたりけん。判官弓を

取り落し。波にゆられて流れしに

地上 其をりしもひく汐にて。遙に遠く

流れ行くを

シテ詞 敵に弓を取られじと。

駒を波間に泳がせて。敵船近くなりし

地上 程に 敵はこれを見しよりも。船を

寄せ熊手に懸けて既に危く見え給ひしに

シテ詞 されども熊手を切り拂ひ。終に弓を取り返し。本の渚にうち上がれば

地上「其時兼房申すやう。口惜しの御ふるまひやな。渡邊にて景時が申しもこれにてこそ候へ。縦ひ千金を延べたる御弓なりとも。御命には代へ

又ハ次第なるべし。

給ふべきかと。涙を流し申しければ。判官
これを聞しめし。いやとよ弓を惜むに
あらず。義經源平に弓箭を取
て。私なし。然れども。佳名はいまだ半な
らず。されば此弓を敵に取られ。義經は
小兵なりといはれんは。無念の次第
なるべし。よしそれ故に討たれんは。力

あし義經ぐ。運の極と思ふべし。さらぎれ敵ゝ渡さじとて浪ゝゆられ弓取の。名ハ末代ゝあらぎやと。語り給へバ兼房さて其外の人までも皆感涙を流しけり智者ハ惑ぎ勇者ハ恐れぎの。弥猛心の梓弓敵ゝハ取り傳へじと。惜むハ名のため惜まぬハ。

一命あれバ。身を捨てゝこそ後記にも。佳名を留むべき弓筆の跡なるべけれ

又修羅道の鬨の聲　矢叫びの音。震動せり　けふの修羅の敵ハ誰ぞ。なに能登の守教經とや。あら物々しや手並ハ知りぬ。思ひぞ出づる壇の浦の　其船軍今ハはや。其船軍

今はや浮み帰る生死の。海山一
同に震動して。船よりは閧の聲

シテ 陸には波の楯

地 月にしらむは

シテ 劔の光

地 潮に映るは

シテ 兜の星の影

地 水や空空行くも又雲の波の。撃ち合ひさし違ふる。船軍のかけひき浮き沈むとせし程に。春の夜の

地拍子 水や空空

波より明けて敵と見えしハ群れ居
る鴎の聲と聞えしハ浦風なりけり
高松の浦風なりけり高松の朝嵐
とぞなりにける

文學博士 井上頼圀 本文監修
丸岡桂 本文訂正
観世清之 節附訂正

稽古摘要

習ひたる師匠

始めたる年月日 大正　年　月　日

終りたる年月日 大正　年　月　日

稽古

感想

使用家の特権

観世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別輯組二十八番二十八冊の各一組、或は三組を悉く買ひ揃へられ候節、返送料を添へて發行所へ送附せられれば、装幀料は無料にて五番綴の美本に仕立直し御返送可申上候。かくして使用家は期せざるに一揃の五番綴謡本を得らるべく候

大正七年五月二十日印刷
大正七年五月三十日發行

著作權所有

發行者 東京市神田區今川小路三丁目九番地 土居源太郎

印刷者 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條愷

印刷所 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條式金屬版印刷所

大正版 一番綴

發行所 東京市神田區今川小路三丁目九番地
電話本局三六〇九、振替東京一三四七五
觀世流改訂本刊行會